

秋も深まり、木々はきれいな模様替えをしている。  
実りも豊富なこの時期、キッチンでじゃがいもを切っていたルルが  
つぶやいた。

「そろそろ収穫祭の時期よね」

「ああ、そうだね。この時期はイルムも落ち着かない様子だったっ  
け」

「あのね。クレールでも小さいけれど、お祭りがあるの」

フローランダでは秋になると、各地で収穫祭が行われる。  
それはこの町も同じのようだ。

「せっかくだから、クレールの収穫祭をツバメに楽しんでもらいた  
いと思っていて」

「それって、もしかしてルルからのお誘いだったりする？」

そんなつもりじゃない、みたいな言葉が返ってくると思っていたの  
に。

「ええ、そうよ。一緒に行きましょう？」

包丁を置いたルルが、まっすぐに見つめてくるものだから。  
視線をそらす理由が、見つからなかった。

「……喜んで」

切られたじゃがいもを鍋に入れる手が、止まる。  
彼女の瞳に映る自分はどんな顔をしていただろう。  
俺の返答に、ルルはうれしそうに笑っていた。



収穫祭当日。

穏やかな空気が漂う町に、にぎわいの声が響いている。

あちこちに大きなかぼちゃが飾られ、屋台が並ぶ。

大鍋で煮込まれた根菜スープ、木工店の小物、焼き菓子などが見えた。

「どこから回りたい？」

「うーん。とりあえずひとつずつ見ていってもいい？」

「もちろんよ」

スープ屋台に近づくと、ローリエとタイムの香りが漂ってきた。

店員に声をかけ、スープをひとつずつ購入する。

一口飲むと、コンソメの風味が口いっぱいに広がった。

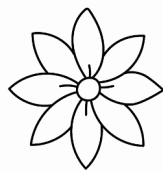
「おいしい」

「でも俺、ルルの料理も好きだなあ」

「そう……？ ツバメっていつもおいしいって言いながら食べてくれるから、なんでもそう言う人なのかと思ってた」

「そんなことはないよ。ちゃんとおいしいものにしか言わないって」

「……ふーん。じゃあ、今まで食べた私の料理の中でなにが一番好きだった？」



「次に行こうか」

そして、私たちは木工店の屋台へ向かった。

一面にずらりと並んでいるのは、木製でつくられた小物やアクセサリ。

玄関にかけられる札から小さな一輪挿しまで様々だ。

「ルル見て。これ、手彫りみたいだよ」

指輪を持つツバメの手に、視線を移した。

「模様が細かくてすごいわね」

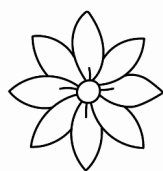
「うん。きれいだ」

「ねえ、ツバメってこういうアクセサリを誰かに贈ったことはある？」

「え、どうして？」

「少し、気になって」

言うてから、私はほんの少し目をそらした。



「そろそろ次、行きましょうか」

店主にお礼を告げてから焼菓子店へ向かった。

マフィンやクッキーが並び、バターの匂いが漂ってくる。

「見て、このクッキー。にんじんの形をしてるよ」

ほかにも動物を模したアイシングクッキー、ドライフルーツがたくさん入ったパウンドケーキもある。

「ルルはどれを買う？」

「うーん。迷うわ。仕事の合間に食べるにはクッキーがいいかしら……」

「仕事の合間に食べてるんだ」

「少しだけね！　そういうツバメだって、配達先でお菓子もらったりしてるじゃない」

「えっ！　どうして知ってるの？」

「ロッソおばあちゃんから聞いたのよ」

「ああ、見られてたんだ……」

「お互いさまってことね」

私たちは思い思いにお菓子を選び、購入した。

「ほかに買いたいものはある？」

「このくらいにしておこうかしら。一通り見てまわる？」

「うん。そうだね」

「わかったわ。じゃあ、あっちに行ってみましょう」

屋台を一周するころには、空が茜色に染まっていた。

もうすぐ収穫祭が終わる。

胸に灯<sup>とも</sup>ったさみしさを、袋に入った焼菓子が和らげてくれるような気がした。

こうして、私たちはリーファへの帰路へつく。